

資 料

領域別三次元統制感尺度の検討

桜井 茂 男*

INVESTIGATION OF CHILDREN'S THREE DIMENSIONAL AND
DOMAIN-SPECIFIC SCALE OF PERCEIVED CONTROL.

Shigeo SAKURAI

A Japanese edition of new self-report scale of children's perceptions of control, previously developed by Connell (1985), is described here. Perceptions of control are defined as children's understanding of the locus being sufficient causes for successful or unsuccessful outcomes. 3 dimensions of fourth- through sixth-grade children's perceptions of control are independently assessed: internal, powerful others, and unknown. Each of these sources of control is assessed within 3 behavioral domains: cognitive, social, and physical. General items are also included. Perceptions of control over both successful and unsuccessful outcomes are assessed separately. The psychometric properties of the new scale are presented. Correlations of the new scale with measures of perceived competence and hopelessness are reported. It is argued that the new scale is a progress over existing scales of internal versus external locus of control in children because it provides domain-specific assessments of 3 separate dimensions of locus of control, including the previously untapped dimension of unknown control.

Key words: Locus of Control, perception, competence, hopelessness, children.

問題と目的

成功や失敗といった行動の結果の原因は、いったい何に帰属されるのか、すなわち、統制感 (perception of control) を知ることは、行動の動機づけや認知の説明に対して重要な役割を果たすと考えられる。Rotter (1966) は、内的 (internal) か外的 (external) かという統制の位置 (Locus of Control, 以下 LOC と略す) の一次元性を仮定して、尺度を作成した。しかし、その後の研究では多次元性を主張する傾向が強くなり、新しい尺度の作成が試みられている。Levenson (1973, 1974), Levenson & Miller (1976) は、外的統制の複雑さを指摘し、internal 尺度 (I 尺度), powerful others 尺度 (PO 尺度), chance 尺度 (C 尺度) の 3 つの下位尺度からなる新しい尺度を作成し

た。この尺度では、従来、外的統制と考えられていた概念を、相対的に安定しているゆえに予測可能な PO 尺度と、相対的に不安定なゆえに予測不可能な C 尺度に分割したわけである。

一方、Connell は、新しい子ども用統制感尺度の作成にあたり、その初版 (Connell, 1977) において、Levenson の C 尺度に類似した項目から高い信頼性を得た。それにもかかわらず、成功や失敗の理由について実際にインタビューを受けた子どもたちは、まれにしか chance (偶然) の帰属を用いなかった。Connell (1985) は、このことは出来事が起こった理由がわからないということと関係があるものと考え、また、インタビューにおいて子どもたちが、「わからない」という反応を多く示していることから、新しく unknown 尺度 (U 尺度) を設定した。最終的に、Connell の尺度は、I 尺度、PO 尺度、U 尺度という三次元の単極性要因で構成された。尺度の特徴としては、領域特殊的事であること、結果を成功と失敗に

* 日本学術振興会特別研究員 (筑波大学) Junior Scientists Fellow in the Japanese Society for the Promotion of Science (University of Tsukuba)

分けていることがあげられる。そして、分析の結果、尺度の信頼性と妥当性も認められた。

そこで、本研究では、Connell (1985) の子ども用統制感尺度の日本語版を作成し、その妥当性を検討することを目的とした。妥当性の検討については、有能感を測定する桜井 (1983) の認知されたコンピテンス (competence) 測定尺度、自己および将来に関する否定的な期待を測定する桜井 (1985) のホープレスネス (hopelessness: 失望感) 測定尺度、従来の internal-external control を測定する鈴木 (1981) の Locus of Control (LOC) 尺度との相関が分析された。有能感尺度では、有能感が高い程 internal 傾向が強いと考えられるため、I 尺度と正の、PO 尺度・U 尺度とは負の相関が、失望感尺度では、行動の結果が自分自身の統制下にないと感じる程、失望感が高くなると考えられるため、PO 尺度・U 尺度と正の、I 尺度とは負の相関が、LOC 尺度では、外的統制が強い程高得点となるため、PO 尺度と正の、I 尺度とは負の相関が、本尺度との間に予測された。

方 法

被調査者

茨城県下の公立G小学校の4年生2クラス81名 (男子48名, 女子33名), 5年生2クラス87名 (男子49名, 女子38名), 6年生2クラス70名 (男子40名, 女子30名) の合計238名 (男子137名, 女子101名) であった。

測定尺度

領域別三次元統制感尺度 (p.273参照) は、Connell (1985) の尺度の48項目を日本語に訳して用いた。従来の LOC 尺度と比較した本尺度の特徴は、第1に、LOC を領域別に測定しようとしている点である。従来の尺度では項目はすべて general (一般領域) であったが、本尺度では cognitive (学習), social (友人関係), physical (運動), general (一般) の4領域における領域特殊な LOC を測定している。第2に、統制の位置に従来の internal, external (powerful others) に加え、unknown を含めたことである。そして、internal と external を対立する概念にとらえずに、unknown も含めて単極性の三次元により測定している。

項目は、4領域 (cognitive, social, physical, general), 三次元 (internal, powerful others, unknown), 行動の結果 (成功, 失敗) により決められ、各2項目ずつのため、48項目から構成された。回答形式は、「とてもよくあてはまる」、「すこしあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「まったくあてはまらない」の4段階評定 (4, 3, 2, 1点) である。

失望感の測定のためには、桜井 (1983) の児童用ホープレスネス測定尺度が用いられた。ホープレスネスは「自己および将来に関する否定的な期待」(Stotland, 1969) と定義される。Beck ら (1974) により、成人のホープレスネスを測定する尺度が開発された。そして Kazdin ら (1983) は、Beck らに準拠して子ども用ホープレスネス測定尺度を作成した。本尺度はこの日本語版であり、17項目からなる。回答形式は4段階評定で、項目ごとにホープレスネスの高い反応から、4, 3, 2, 1点と得点化された。

有能感の測定のためには、桜井 (1983) の認知されたコンピテンス測定尺度が用いられた。Harter (1979) の尺度の日本語版であり、cognitive, social, physical, general self-worth という4つの下位尺度の28項目からなる。cognitive では学習, social では友人関係, physical ではスポーツに対する、それぞれ認知された有能さを測定している。general self-worth では、それよりも高次の生活全般に渡る認知された有能さを測定している。回答形式は2回の2件法による4段階評定で、項目ごとにコンピテンスの高い反応から、4, 3, 2, 1点と得点化された。

Locus of Control の測定には、鈴木 (1981) の I-E 尺度が用いられた。Locus of Control は「自分の行動とそれにひき続き生起する報酬や罰との関係の知覚の仕方、その最適な方法に関する般化、期待、あるいは信念」(Phares, 1978) とされている。従来、LOC の2つの極として、内的統制、外的統制が考えられていた。児童・生徒用の LOC 尺度としては、Nowicki-Strickland (1973) や Bialer (1961) の尺度が頻繁に用いられている。本尺度は、この2つを原尺度とし、日本で適用できるように修正を加えて作成された日本語版である。内的統制項目、外的統制項目合わせて22項目から構成され、「はい、いいえ」の真偽法を用いている。内的統制項目に対して「いいえ」、外的統制項目に対して「はい」と答えた場合、1点が与えられた。

手続

1986年1月中旬、上記の領域別三次元統制感尺度が、クラス単位の集団で実施された。教師が1項目ずつ朗読し、それに被調査者が回答する方法がとられた。また、同時に妥当性の検討のために、4年生には I-E 尺度が、5, 6年生には認知されたコンピテンス測定尺度と児童用ホープレスネス測定尺度が実施された。データの分析は、Connell (1985) に準拠し、筑波大学学術情報処理センターの SPSS を用いて行われた。

結 果

Connell (1985) に従い、領域別に因子分析（主因子法、固有値 = 1 → 斜交回転）を行った。その結果、学習領域では 4 因子（unknown, powerful others-negative, internal, powerful others-positive）、友人領域では 6 因子（powerful others-positive, unknown-positive, internal-positive, powerful others-negative, internal-negative, unknown-negative）、運動領域では 4 因子（powerful others, internal-positive, internal-negative, unknown）、一般領域では 5 因子（powerful others-positive, internal-positive, powerful others-negative, unknown, internal-negative）が見出された（TABLE 1～4）。Connell (1985) の研究では、学習と友人領域は 3 因子、運動領域が 4 因子、一般領域が 5 因子であるから、学習領域と友人領域において本研究のほうが因子が増えたことになる。これは、学習領域では powerful others が、友人領域ではすべての次元が positive（成功）と negative（失敗）の因子に分かれたことによる。しかし、以後の分析では主に、Connell (1985) との比較を行うために、I（internal）尺度、PO（powerful others）尺度、U（unknown）尺度の 3 つに大きく分けて行うことにする。

TABLE 1 には学習領域における因子分析の結果と項目平均、項目 SD および α 係数が示されている。煩雑さ

TABLE 1 学習領域における因子パターンと項目平均、項目 SD および α 係数*

下位尺度/項目**	I	II	III	IV	h^2	項目X	項目SD	α
unknown								
Na 31	.69			.48	2.00	.88	} .66	
7	.57			.31	2.02	.94		
46	.52			.34	2.01	.86		
22	.45			.34	2.05	.90		
powerful								
others								
Na 27				.91	.76	1.60	.78	} .69
3				.49	.32	1.76	.91	
18		.59		.43	2.04	.99		
42		.89		.79	1.85	.94		
internal								
Na 11			.59	.34	3.88	.38	} .56	
35			.71	.47	3.79	.54		
38			.33	.19	3.41	.84		
14			.40	.21	3.34	.86		

* 各因子は次のように解釈された。

因子 I : unknown

II : powerful others-negative

III : internal

IV : powerful others-positive

** 項目番号は、付録のそれと対応する。

を避けるために因子パターン（負荷量）は、.30 以上のものが記載されている。本研究では、4, 3, 2, 1 点の 4 段階評定で回答されているため、項目の理論的平均は 2.50 となるが、TABLE 1 の項目平均をみると I 尺度においてこの理論的平均よりもかなり高い値が示されている。TABLE 2～4 においても同様に、I 尺度の項目平均が高いことがうかがえる。本尺度では、このような項目を削除すると項目数が少なくなり、Connell (1985) との比較も困難となるためこのままにしておくことにした。

下位尺度（U, PO, I）の内的-一貫性を調べるために、クロンバックの α 係数が用いられた。TABLE 1 に示されているように、I 尺度における α 係数の値は最も小さい。TABLE 1～4 に示されている各領域の α 係数を平均してみても、I 尺度においてその値はかなり小さかった。

TABLE 5 には、主に、次元や領域の間の特殊性をみるために、領域間および領域内での下位尺度の相関が示されている。これによると、領域間では U, PO, I の各下位尺度内に中程度の正の相関が認められるが、その中では I 尺度のそれが一番低い。領域内での各下位同一尺度間の相関（太字の部分）をみると、U 尺度と PO 尺度

TABLE 2 友人領域における因子パターンと項目平均、項目 SD および α 係数*

下位尺度 /項目	**	I	II	III	IV	V	VI	h^2	項目 X	項目 SD	α
unknown											
Na 43			.82					.67	2.34	.97	.54
19			.45					.23	2.40	.99	
28						.46	.29		2.25	.93	
4						.70	.48		2.34	.94	
powerful											
others											
Na 39		.75						.61	1.74	.83	.69
15		.83						.67	1.89	.90	
36				-.76				.62	2.15	.97	
12				-.79				.61	2.37	.99	
internal											
Na 47			.63					.45	2.80	.89	.40
23			.77					.59	2.83	.90	
8					.61			.42	3.00	.92	
32					.65			.42	2.76	1.03	

* 各因子は次のように解釈された。

因子 I : powerful others-positive

II : unknown-positive

III : internal-positive

IV : powerful others-negative

V : internal-negative

VI : unknown-negative

** 項目番号は、付録のそれと対応する。

TABLE 3 運動領域における因子パターンと項目平均, 項目SDおよび α 係数*

下位尺度 /項目 **	I	II	III	IV	h ²	項目X	項目SD	α
unknown								
No 1				.48	.25	2.08	.82	.54
25				(.26)	.14	2.04	.97	
40				.44	.32	1.99	.80	
16				.64	.37	1.89	1.00	
powerful								
others								
No 33	.72			.49		2.15	.94	.73
9	.50			.30		1.90	.81	
24	.67			.45		2.48	.95	
48	.66			.46		2.37	.97	
internal								
No 5	.71			.50		3.61	.66	.60
29	.96			.93		3.60	.68	
20		-.70		.51		3.19	1.00	
44		-.90		.79		3.12	1.06	

* 各因子は次のように解釈された。

因子 I : powerful others

II : internal-positive

III : internal-negative

VI : unknown

** 項目番号は, 付録のそれと対応する。

の相関がすべて有意であることがわかる。

次に, 性×学年(2×3)の分散分析を行った。運動領域のPO尺度において性差がみられた($F(1, 232)=6.54$, $p<.05$)。学年が上がるにつれて, 性差がだんだん小さくなっていく傾向があった。学年差は一般領域のU尺度($F(2, 232)=3.64$, $p<.05$)とPO尺度($F(2, 232)=3.51$, $p<.05$)でのみ認められた。学年が進むにつれてUもPOも減少する傾向がみられる。しかし, Connell (1985)の研究では, 四領域すべてで顕著な減少傾向がみられている。

本研究で用いられた尺度の妥当性を検討するために, LOC, 有能感, 失望感の各尺度との相関係数が算出されたが, それらはTABLE 6に示されている。これによると, LOCとの関係ではUとPO尺度において正の相関がみられたが, I尺度ではみられなかった。また, 失望感との関係においては, U尺度では正の相関が, I尺度では負の相関がみられ, PO尺度には有意な相関がみられなかった。有能感との関係では, Connell (1985)によると友人領域や運動領域で有意な相関がみられるのに対し, 本研究では学習領域においてのみU尺度に正の相関がみられた。

TABLE 4 一般領域における因子パターンと項目平均, 項目SDおよび α 係数*

下位尺度 /項目 **	I	II	III	IV	V	h ²	項目X	項目SD	α
unknown									
No. 37				.56		.31	2.27	.89	.60
13				.41		.24	2.29	.94	
34				.73		.58	2.35	.89	
10				.42		.20	2.37	.88	
powerful									
others									
No. 45	.88					.77	2.20	.97	.62
21	.81					.68	2.40	1.04	
6			.85			.75	2.68	.91	
30			.56			.36	2.69	.87	
internal									
No. 17	.71					.55	2.49	.83	.42
41	.87					.79	2.50	.85	
2					.45	.22	2.88	.88	
26					.52	.29	3.01	.82	

* 各因子は次のように解釈された。

因子 I : powerful others-positive

II : internal-positive

III : powerful others-negative

VI : unknown

V : internal-negative

** 項目番号は, 付録のそれと対応する。

TABLE 5 下位尺度間の相関係数

	unknown				powerful others				internal			
	C	S	P	G	C	S	P	G	C	S	P	G
unknown												
学習(C)	—											
友人(S)	.41	—										
運動(P)	.56	.34	—									
一般(G)	.51	.44	.43	—								
powerful others												
学習(C)	.24	ns	.17	ns	—							
友人(S)	.18	.16	ns	ns	.33	—						
運動(P)	.31	.19	.31	.27	.36	.32	—					
一般(G)	.25	.18	ns	.23	.24	.30	.26	—				
internal												
学習(C)	-.23	ns	-.18	ns	-.14	ns	ns	ns	—			
友人(S)	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	.21	.23	—		
運動(P)	ns	ns	-.22	-.16	-.14	-.15	ns	ns	.35	.15	—	
一般(G)	ns	.15	ns	ns	ns	ns	ns	ns	.26	.20	.20	—

何も印のついていないすべての数字は $p<.001$ ** $p<.01$, * $p<.05$

TABLE 6 LOC 尺度, 有能感尺度, 失望感尺度との相関係数

	LOC	有 能 感 (学習)(友人)(運動)(一般)					失 望 感
学 習							
unknown	.29*	-.40***	.01	-.07	-.12		.32***
powerful	.25*	-.08	-.03	.02	.01		.08**
others							
internal	-.11	.04	.03	.16*	.05		-.25**
友 人							
unknown	-.03	-.21**	-.08	.05	-.24**		.10
powerful	.24*	-.19**	-.08	.04	-.09		.07
others							
internal	-.00	-.08	.04	.16*	.12		-.28***
運 動							
unknown	.32**	-.16*	-.02	-.02	-.02		.24**
powerful	.50***	-.12	-.08	-.10	-.02		.13
others							
internal	.01	-.08	-.04	.01	.03		-.36***
一 般							
unknown	.10	-.33***	.01	.01	-.04		.24**
powerful	.25*	-.20*	-.11	.06	-.15		.13
others							
internal	-.19	.02	-.10	.02	-.15		-.16*

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

考 察

因子分析については, Connell の研究よりも因子の乱れが少なく, 因子パターンが明確になったと言えよう。特徴として, 成功と失敗によって因子が分かれた次元の多いことがあげられる。Connell では, 成功と失敗で分かれたのは運動と一般領域の2つだけであるのに対して, 本結果では学習・友人・運動・一般の全領域においてそれが見られる。特に, 友人領域においてはU, PO, I, の3つの次元でそれぞれ成功と失敗に分かれ6因子が抽出されている。これは Connell の研究と比べて大きな差異であり, 本研究の児童の場合には成功, または失敗という結果に影響されやすいと言えよう。

次に, 項目平均についてであるが, 理論上から言えば項目平均は2.50であるが, 学習領域の Internal 次元の項目平均は3.50であった。これは Connell の結果においても共通して言えることだが, 成績が良かったり悪かったりするの自分のせいだと自分自身に帰属させる傾向が強いと言えよう。

信頼性についてみると, 下位尺度の内的一貫性は, α 係数より推定された。学習・友人・運動・一般全領域において, I 尺度の α 係数が低い傾向にある。これは成功と失敗に分かれている下位尺度であっても, 4項目で α 係数を求めたためであり, 成功と失敗で分かれている領域が多い I 尺度の信頼性が必然的に低くなったのである。

次元ごとの各領域の下位尺度間の相関 (TABLE 5) の

太字の部分は, 領域間での各統制因下位尺度の相関を示す。領域内でのUとPOの両下位尺度間に正の相関が認められた一方, IとPO, IとU下位尺度の相関はほとんど有意でないことから, Connell の言うように「Unknown Control は単なる Internal もしくは Powerful Others Control の認知の欠如ではない」ことを示すものと考えられる。また, I 尺度とPO尺度とが負の有意な相関関係にはないことから, いわゆる Internal と External は対立的概念ではないとも言えよう。領域間での各統制因下位尺度についても正の相関が見られた。最も相関が強いのはU尺度であり, 低かったのはI尺度であった。領域によって違いがあるのではないかと推測される。

次に, 性×学年 (2×3) の分散分析によると, 性差は運動領域のPO尺度にだけ見られた。女子の方が5%水準で有意に高いということは, 女子は運動の勝敗の原因を他者に帰属させる傾向が大きいということである。学年差は一般領域におけるU尺度とPO尺度において見られ, どちらも減少傾向であったことから, 成功や失敗の原因の理解が年齢とともに増加し, また他者への帰属も減っていくことを示している。これは Connell の研究と同様の結果である。それに対して I 尺度においては有意な傾向が見られなかったことから, UやPOが減少すると同時にIが増えていく訳ではないと言えよう。しかし, 本研究は学年数が3つと少なかったため, 学年数がより多い場合は違った結果が得られるかもしれない。

妥当性は従来の LOC 尺度と, 有能感尺度と失望感尺度との相関で検討された。まず, 従来の LOC 尺度との相関を見るとP尺度は予測したように正の相関を示した。U尺度においても相関は見られたが低かった。従来の LOC 尺度は External と Internal という区別であるので, 本研究のPO尺度と相関があるということは, 従来の LOC 尺度の External は Powerful Others に対応するのではないだろうか。また Internal においては負の相関が予測されたが支持されなかった。これらの結果は, External と Internal が対立概念ではないことを示唆する。次に, 有能感尺度との相関を見ると, PO尺度およびU尺度とは負の相関があるだろうとする予測が, 有能感の学習領域でのみ支持された。他の領域ではほとんど相関がないと言える。学習に対する有能感の高い子供程, 領域に限らず成功や失敗の原因の理解がなされていると考えられる。Connell の研究では有能感の学習領域ではU尺度と, 友人, 運動領域ではPO尺度との負の相関が認められているのに対して, 本研究では学習領域での下位尺度だけに認められた。これは, 成功と失敗に

因子パターンが分かれたにもかかわらず成功と失敗を一緒にし、友人領域、運動領域というそれぞれ1つの領域として相関をみたためと考えられる。次に、失望感尺度との相関をみると、U尺度とI尺度において有意な相関がみられた。学習、友人、運動、一般、全領域を通じてU尺度の場合つまり成功や失敗の原因の理解が低いと、期待感が少ないことを示す。逆に成功や失敗をInternalに帰属させることが高くなるに従って期待感が高くなると言える。他者による統制が期待感へ影響することは少ないようである。失望感尺度は一般的な領域で項目が作られており、項目自体に他者が登場しないことも相関の低さに影響を与えたのではないだろうか。

以上、因子分析、信頼性、妥当性について考察を行ってきたがまとめると、従来のLOC尺度には含まれていなかったUnknown Controlを含めた本尺度での結果、このUnknown Controlが注目すべき結果をいくつか示したことが重要である。このU尺度が子供へのインタビューの結果導き出されたもの(Connell, 1985)であり、また学習のコンピテンスや失望感などとの相関が有意であったことから、子供のスケール作成において有効であると言えよう。さらに、従来の研究ではLOCがInternalかExternalかという両極性の概念であったのに対して、本結果では必ずしもInternalとExternalが両極として現われず対立的概念とは言えない点も重要であろう。

引用文献

- Beck, A.T., Weissman, A., Lester, D., & Trexler, L. 1974 The measurement of pessimism: The hopelessness scale. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 861—865.
- Bialer, I. 1961 Conceptualization of success and failure in mentally retarded and normal children. *Journal of Personality*, 29, 303—320.
- Connell, J.P. 1977 *A new multidimensional measure of children's perceptions of control*. Paper presented at the biennial meeting of the Society for Research in Child Development, New Orleans.
- Connell, J.P. 1985 A new multidimensional measure of children's perceptions of control. *Child Development*, 56, 1018—1041.
- Harter, S. 1979 *Perceived competence scale for children* (manual). University of Denver.
- 樋口一辰・清水直治・鎌原雅彦 1980 Locus of Control に関する文献的研究 東京工業大学人文論叢, 5, 95—132.
- Kazdin, A.E., French, N.H., Unis, A.S., Esveltd-Dawson, K., & Sherick, R.B. 1983 Hopelessness, depression, and suicidal intent among psychiatrically disturbed inpatient children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 51, 504—510.
- Levenson, H. 1973 Multidimensional locus of control in psychiatric patient *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 41, 397—404.
- Levenson, H. 1974 Activism and powerful others: Distinction within the concept of internal-external control. *Journal of Personality Assessment*, 38, 377—383.
- Levenson, H., and Miller, J. 1976 Multidimensional locus of control in sociopolitical activists of conservative and liberal ideologies. *Journal of Personality and Social Psychology*, 33, 199—208.
- Nowicki, S., and Strickland, R. 1973 A locus of control scale for children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 40, 148—154.
- Phares, E.J. 1978 Locus of Control. In H. London and J.E. Exner (Eds.), *Dimensions of Personality*. New York: John Wiley & Sons.
- Rotter, J.B. 1966 Generalized expectance for internal vs. external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, 80 (Whole No. 609), 1—28.
- 桜井茂男 1983 認知されたコンピテンス測定尺度(日本語版)の作成 教育心理学研究, 31, 60—64.
- 桜井茂男 1985 児童用ホープレスネス測定尺度の作成 日本相談学会第18回発表論文集, 70—71.
- Stotland, E. 1969 *The psychology of hope*. San Francisco: Jossey-Bass.
- 鈴木圭子 1981 学業達成度及ぼす統制の型及び親の養育態度の影響に関する研究 筑波大学卒業論文〈謝辞〉

本研究の手伝いをしてくださった筑波大学人間学類の中島純子さん、中村直美さん、細川いづみさん、三村浩美さんに感謝します。

(1986年4月8日受稿)

領域別三次元統制感尺度の項目*

1. スポーツで勝ったとき、どうして勝てたのかわからないことが多いです。
2. 失敗することがあれば、それはたいてい自分のせいです。
3. 良い成績をとる一番よい方法は先生に気にいられることです。
4. だれかにきらわれたとき、どうしてきらわれたのかわからないことが多いです。
5. いっしょうけんめいやれば、どんなスポーツでもうまくなれると思います。
6. 自分がやりたくてもまわりの大人がゆるしてくれそうもないことは、たぶんできないと思います。
7. 学校でよい成績をとったとき、どうしてよい成績をとれたのかわからないことが多いです。
8. だれかにきらわれるのは、たいてい自分がその人に何か悪いことをしたせいです。
9. スポーツで勝ったとき、それはたいてい相手が、不得意だったからです。
10. 悪いことが起こったとき、それがなぜ起こったのかわからないことが多いです。
11. 学校でよい成績をとりたいなら努力すればよいと思います。
12. 先生にきらわれたとしたら、たぶんクラスメートにも好かれれないと思います。
13. なぜ良いことが起こったのかわからないことが多いです。
14. 学校の成績が良くないのは、たいてい自分のせいです。
15. クラスのリーダーになりたいならば、人気のある子に好かれなければなりません。
16. 100m走(かけっこ)で負けたとき、どうして負けたのかわからないことが多いです。
17. 毎日の生活の中で起こることは、ほとんど自分でなんとかできます。
18. よくない先生に教わるなら、成績は悪いと思います。
19. 自分がまわりの人からどうして好かれるのかわからないことが多いです。
20. ドッジボールでボールをうまくとれないのは、たいてい自分がいっしょうけんめいとうろとしなかったせいです。
21. 欲しいものがあるときは、親の言うことをよく聞けばよいと思います。
22. 学校で悪い成績をとったとき、どうして悪い成績をとったのかわからないことが多いです。
23. だれかに好かれるのは、たいてい自分のつきあい方がよいせいです。
24. スポーツで友だちに負けたとき、それはたいてい相手が得意だったからです。
25. 100m走(かけっこ)で勝ったとき、どうして勝ったのかわからないことが多いです。
26. うまくやれないことがあれば、それはたいてい自分のせいです。
27. 学校でよい成績がとれるのは、先生に気にいられているからだと思います。
28. 友だちにきらわれたとき、どうしてきらわれるのかわからないことが多いです。
29. いっしょうけんめい練習すれば、どんなスポーツでもうまくなれると思います。
30. 自分がやりたくてもまわりの大人がゆるしてくれそうもないことは、なかなかできません。
31. 学校でよい成績をとったとき、どうしてよかったのかわからないことが多いです。
32. いじわるをされるのは、たいてい自分がその人に何か悪いことをしたせいです。
33. 友だちとかけっこをして勝ったとき、それはたぶん友だちが不得意だったからです。
34. なぜ悪いことが起こったのかわからないことが多いです。
35. よい成績をとりたいたなら、いっしょうけんめいがんばればよいと思います。
36. 先生にきらわれたとしたら、たぶんそのクラスではあまり友だちができないと思います。
37. よいことが起こったとき、それがなぜ起こったのかわからないことが多いです。
38. 成績が悪いのは、自分のせいです。
39. クラスのみんなからリーダーと思われたいなら、人気のある子となかよくしなければなりません。
40. スポーツで友だちに負けたとき、たいていどうして負けたのかわかりません。
41. 毎日の生活の中で起こることは、ほとんど自分で解決できます。
42. よい先生に教われないなら学校の成績は悪いと思います。
43. 友だちからどうして好かれるのかわからないことが多いです。
44. ドッジボールでボールをとれないのは、たいてい自分ががんばってとうろとしなかったせいです。
45. 何かがほしいときは、親の言うことをよくきけばよいと思います。
46. 学校での成績がよくないとき、どうしてよくないのかわからないことが多いです。
47. 友だちができるのは、たいてい自分のつきあい方がよいからです。
48. 100m走(かけっこ)で勝てなかったとき、それはたぶん相手が得意だったからだだと思います。

* 項目番号は、本文中の TABLE 1～4 の項目番号と対応する。